

氏名	劉也
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第30号
学位授与日	2019年3月16日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	東洋現代美術における絵画制作手法の偶然性の研究 —蔡国強と白髪一雄の比較から—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 赤塚 祐二 副査 武蔵野美術大学 教授 田中 正之 副査 武蔵野美術大学 教授 高島 直之 副査 武蔵野美術大学 教授 是枝 開

## 内容の要旨

本論文は、蔡国強と白髪一雄の二人の東洋の芸術家を軸にして比較研究を行ない、偶然性が具体的に絵画制作上でどのような役割を果たすのかを明らかにする。

先行研究の中で注目した管一秋による「実践芸術創作中の偶然性分析」という修士論文を論考の出発点とし、その中で計画的な偶然性と無計画的な偶然性の二つの種類があるという記載を本論文の研究の基礎とした。また、研究対象とする東洋人芸術家を、偶然性を作品の中で大きく取り上げ比較研究できる作家とし、中国人の蔡国強と日本人の白髪一雄という二人の芸術家を取り上げた。その上で、絵画を実際に描く段階における偶然性のあり方の事例を、比較研究という視点に的を絞る論考を進めた。最後にその結果を自分の作品の事例と比較研究した。

まず、蔡国強の生活背景、活動歴、火薬爆発制作手法の形成における東洋と西洋の影響について、それぞれの整理を行った。さらに作品の実例の分析を通じ、蔡国強が作品を作成する段階で、計画的な偶然性と無計画的な偶然性はどのように相互的に影響するのかについて述べた。

次に、白髪一雄の個人的背景、活動歴及び独創的なフット・ペインティングという制作手法における東洋と西洋の影響に関する整理を行なった。同様に作品を実例として分析することにより、制作手法における計画的な偶然性と無計画的な偶然性が果たした作用について研究を行なった。

結論として、蔡国強と白髪一雄の制作手法の比較研究を通じ、偶然性の相対的かつ弁証法的な関係について説明した。今回の比較研究を通じ、作品の制作過程における計画的な

偶然性と無計画的な偶然性の重要性を検証することができたと考える。二種の性質が違う偶然が相互的に転化することは、芸術家の創作過程において、更なる可能性と未知の領域への飛躍を可能にし、作品世界の更なる拡張を確実にしたと考えられる。

## 審査結果の要旨

### 論文の概要

本論文は、制作者の立場から、偶然性が絵画に及ぼす影響について、東洋の芸術家である蔡国強と白髪一雄という二人の表現者の比較研究を行ない、偶然性が主に絵画制作上でどのような役割を果たすのかを考察したものである。

先行研究の中で管一秋による「実践芸術創作中の偶然性分析」に注目し、計画的な偶然性と無計画的な偶然性の二つの種類があるという記載を論考の出発点とした。結論として表現者の資質を含めた成り立ちによって、計画性と無計画性の偶然性は相互に、そして微妙に作用し合い、時にはお互いが転化しながら制作が進行しているということを明らかにした。絵画制作において偶然性のもたらす効果の重大さに気づき、論考を通じてその理解を深め、制作に還元していこうとする意思を持った制作者らしい論文となっている。

### 論文の内容と構成

論文は、第1章では序論として研究背景と目的、研究方法について、第2章では絵画制作手法における偶然性について先行研究として管一秋の論文内容の解説、第3章、第4章ではそれぞれ蔡国強と白髪一雄の表現者としての成り立ちと具体的な制作における偶然性の考察、第5章、第6章ではその比較とまとめ、執筆者自身の制作手法における偶然性の分析という構成になっている。

第1章では、現代の美術表現は多元化によって視覚的な刺激と驚きを作り出しており、そこには偶然性を取り込んだ芸術家の活躍があるとし、執筆者自身の興味と必要性に駆られて絵画制作上での偶然性を理解しようと研究を始めたことが述べられている。また、東洋人の二人の芸術家の選択を絞り込んだ意図と、研究方法の具体的検討がなされ、美術史上での偶然性の研究の存在の調査や、近現代での偶然性を盛り込んだ作品の研究を通じて理解した知見を得て、研究方法を示した。

第2章では、出発点となる管一秋による論文「実践芸術創作中の偶然性分析」を検証し、絵画制作手法における偶然性の概念について整理した。管は偶然性を、コンセプトにおける偶然性とアクションにおける偶然性の二つに分類しており、アクションにおける偶然性の中に計画的な偶然性と無計画的な偶然性があると考察したが、この記述に従って執筆者はジョン・ケージやジャクソン・ポロック、水墨画の澆墨の技法、中国の現代芸術家の徐冰、アンセルム・キーファーなどの実例を分析し、様々な事例によって起こる偶然性の影

響による知見を得た。

第3章では蔡国強の人物像、活動の経緯、中国文化や西洋美術の影響が分析されている。蔡はポール・セザンヌに芸術的な姿勢を、エル・グレコに似た境涯を感じたという研究結果から、蔡の芸術に向かう姿勢が明らかにされた。その上で、火薬を使った作品は蔡自身が故郷を思い出すものであり、幼年期の象徴であったと明らかにした。さらに、文献からコントロールという重要な言葉を見いだす。第2章で考察した菅一秋の偶然性を、計画的なもの無計画なものに分類したが、ここで執筆者は、偶然性の計画性と無計画性は意識の持ち方で相対的に現れ、しかも段階的に進行するという独自の研究成果を得る。そしてこの成果を作品分析に応用し、表現者の作品制作の中で起こる偶然性に関して、詳細な事例研究と冷静な視点で、蔡の作品の成り立ちを偶然性のコントロール、偶然性の協力者であるという重要な知見を得た。

第4章は同様に白髪一雄について分析を重ね、理解を深める。第3章で考察し得られた分析手法により、実際の作品や映像資料やインタビューの記事から、白髪一雄のフット・ペインティングは無計画な偶然性が多く存在しているとの分析結果を得る。白髪の絵画は、あらかじめ存在する計画性と一つの完全に作り上げた法則に従いながら、行為の制御力と偶然性を利用し繰り返し破壊する中で、結果として、作家の制御力を超えた無計画な偶然性が作品を成立させているという考察に至る。

第5章は、第3章と第4章でそれぞれ考察した蔡国強と白髪一雄の制作手法における偶然性のあり方を比較し、蔡国強は偶然性のある素材の特性を生かしながらも相対的には計画性のある作品を創出し、白髪一雄は制作手法は行動の制御力と偶然性との衝突を利用し、無計画な偶然性のある抽象的な画面を創出したと評価した。その上で、二人の表現者の最終的に呈した偶然性のあり方には微妙な差異があるが、その差異について正確な結論を出すことは難しいと述べている。

第6章はその結果を踏まえて執筆者自身の作品の事例と比較研究を重ね、絵画制作中に偶然性がどのように関係してくるか自作を通して検証した。

#### 審査の経緯と結果

2019年2月22日(金)に公聴会と審査委員会を開催した。審査委員会では、公聴会での発表と質疑応答を踏まえ審査を行った。

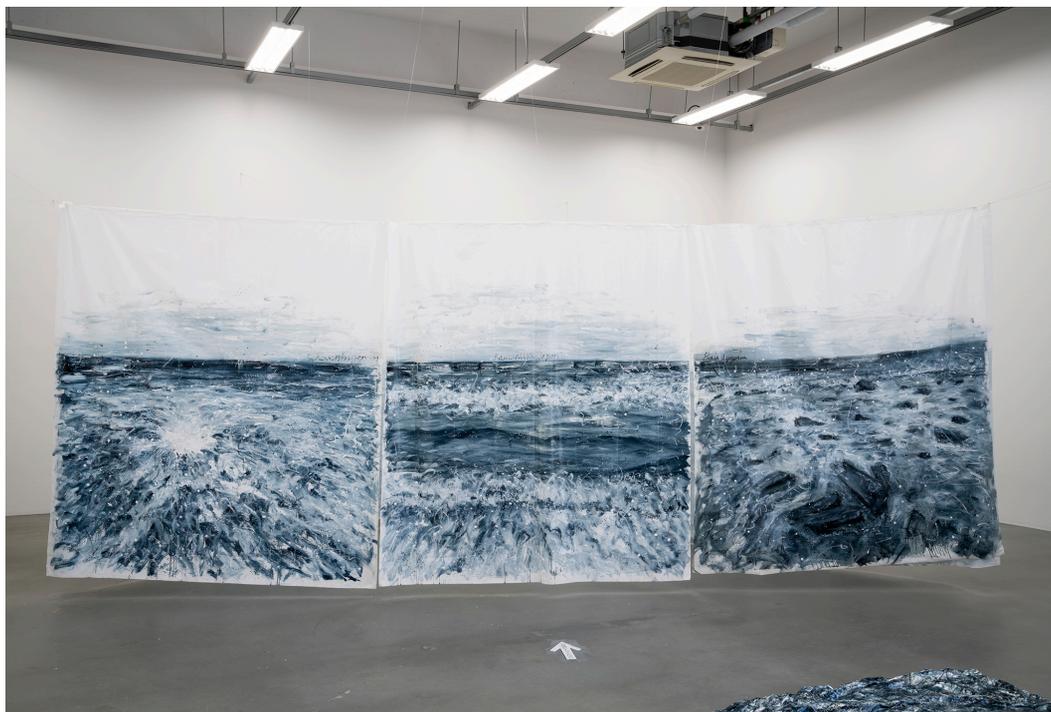
公聴会では偶然性の規定の持ち方に対して多くの質問があった。絵画表現上のすべてか、制作の具体的な手法だけについてなのか、あるいは東洋と西洋での捉え方の違いについての意識、また他のジャンルに属する類似の捉え方が混同されていないか、例えばジャクソン・ポロックの絵画で、意識的な絵具の滴りによって起こる表現を偶然性として捉えるのかなど、偶然性そのものの厳密な捉え方の確認がなされた。作品においては、対象物を具体的に描く場合の筆触より作品配置のインスタレーションのときに偶然性が現れているのではないかという指摘や、ビニールやアルミ箔に付けられた絵の具の耐久力の問題などの

他、様々な角度からの指摘があった。ほとんどの質問に論文執筆者としての考察と知見から、自身の考えを示すことができた。

審査委員会においても、絵画制作手法における偶然性について厳密な規定がなされていない点が指摘されたが、制作者のオペレーショナル立場としての論文の筋は確認できたとして、一定の評価があった。さらに語句の統一など、論文の表記の一部体裁に改善すべき点があるとの指摘も受けた。

執筆者は絵画制作者として偶然性のもたらす効果の重要性に注目し、偶然性という非常に大きく幅広い概念に取り組み、論文執筆に挑んだ。先行研究や歴史的な作品において偶然性もたらした成果を入念に分析研究し、偶然性への独自のスタンスを持って論考を進めた結果、絵画制作において、二種の性質が違う偶然が相互的に転化するという微妙なニュアンスと曖昧さが、作品の更なる可能性と未知の領域への飛躍を可能にしているという考えに至ったことは、制作者の論文として評価に値するものと確認された。

以上の結果を踏まえ、全員一致で合格と判定した。



呼吸

2016年 油彩、シャワーカーテン、小豆、籠 200×218cm×9枚



畳む

2018年 油彩、キャンバス、鏡 210 × 130cm × 2枚



夜の海  
2018年 油彩、アルミホイル 350 x 300cm x 3枚



ムサビの片隅  
2018年 油彩、紙 29.7 x 42cm x 14枚